



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	趣旨説明
Author(s)	下休場, 千秋
Relation	歩く滞在交流型観光の新展開 The New Development through Extended Stay and Interactions with Locals in Walking Tourism
Citation	CATS 叢書, 12, 221-232
Issue Date	2019-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/73751
Type	other
File Information	CATS12_19.pdf



趣旨説明

下休場 千秋

北海道大学観光学高等研究センター教授

このコロキウムを開催する前提として、『歩く滞在交流型観光の新展開』というテーマで今年の 3 月に北大で観光創造研究会を開き、そこで歩く滞在交流型観光の意義、現状と課題について話し合いを持ちました。さらに今回、『旅育』という新たな概念、考え方を合わせてこの歩く観光を考えてみようと思案いたしました。

その 3 月の研究会において歩く滞在交流型観光の事例として、全国から 10 名以上の専門家に集まっていたが、例えばロングトレイルに関しては信越トレイル、潮風トレイル、九州自然歩道の事例について発表していただきました。フットパスに関してはイギリスの事例や日本各地、北海道の事例が取り上げられました。さらにオルレについては済州島や九州や宮城県の事例について発表がなされました。また聖地巡礼は歩くという意味を考える上で非常に重要なテーマだと思いますが、スペインのサンティアゴ巡礼、四国のお遍路、熊野歩道については、何故人は歩くのかという非常に根源的な話もありました。もっと身近なまち歩きは各地で行われていますが、佐世保、水郷・柳川など、さまざまな事例の報告に基づいて議論をいたしました。

まず初めに、人は観光に何を求めるのか、ということですが、根源的というか観光行動を取る発動要因として、ひとつは日常から離れて非日常の暮らし、空間になかにおいて緊張を緩和したいということ。二つ目は楽しいことをしたい、楽しみたいというのが観光の非常に大きな要因です。三つ目は人間関係を深めたい。四つ目は知識を豊かにしたい。五つ目は自分自身を成長させたい。以上です。

要するに、人はなぜ観光するのかと言うときに例えばこの 5 つの要因が考えられるとすると、現代の観光というのが、5 つを満たした観光になっているのかということをもう一度考えてみる必要がある。歩く観光の重要性は、このように何故、人は観光するのかということと考えると見えてくるのではないかと思います。

次に、現代の観光をこの自立的地域社会と「旅育」ということで考えてみますと、横軸は地域住民の誇り・自慢。左側の方はあまり誇りとか自慢を持ってない人たちがいる地域、右の方に行くと地域の人が誇りを持って地域を自慢することのできる人が多い地域。縦軸は観光客の責任意識。責任意識というのは例えば観光問題、オーバーツーリズムの問題などいろいろありますが、ゴミを捨てない、地域に迷惑をかけない観光をする。そういう意識が低いのか高いかで考えてみると、例えば左下の地域住民の誇り・自慢があまりなくて、そこに訪れる観光客の責任意識も低いような観光はどちらかというと発地型、周遊型観光、気晴らし、

レクリエーションを目的とした観光に位置づけることができるのではないか。

歩く観光というのはそれとは違って、右上のほうに地域住民が誇り・自慢を持って生活している、さらにそこを訪れる観光客も問題意識なり地域の人と交流したいなど明確な目的を持ってやってくる人たちがいる。これはどちらかという到着地型、滞在交流型観光、エコツーリズム、歩く観光といった、ただ単に楽しむだけではなく自分が生きている実存体験、生きている喜びを感じる、自身を成長させようとする特定の価値観や目標を持った観光として位置付けられる。旅育や歩く観光は、右上の地域住民と観光客のそれぞれの意識を高めるような基盤がないと成り立たないと思います。

旅育という言葉は学術用語としてはまだ決まったものではありませんが、ここでは「旅する人と地域の人が共に多様な学びの機会を得ることにより、旅を通して人間として成長すること」という意味で考えています。

さらに「歩く旅育」とは、「歩くことを通して、人は何かを学ぶことができ、どのように成長することができるのか」ということを考えることであり、ここではこのような意味として取り上げたいと思っています。

それでは、どのような観光が旅育といえるのか。例えば、この3つの要素があって、まず体験そのものが充実した異文化や非日常の体験、旅先での交流などができるかどうか。二つ目は人と人の時間の共有。普段忙しく生活している人が、ゆっくりと家族や友人、未知の人と出会って共通の体験を持つことができ、思い出を作ることできたり、日常の暮らしから離れてある程度長く共有する時間がもてるかどうか。3つ目は旅を素材とした教育、例えば、観光に関する職業教育、郷土教育、地理・歴史教育、国際化教育、防災教育などさまざまな旅を通した学びが重要視されています。この3つの要素が整っている観光が旅育と言えると思います。

そこで、私が専門としているエコツーリズムはまさしく旅育の一つのかたちであると考えます。エコツーリズムの3つの目的は、地域の自然・文化の保護と保全というのが前提にあり、そのような資源を生かして地域固有の資源を生かした観光の推進を図る。3つ目が地域経済を敢行の推進によって活性化する。これら3つの目的を同時に達成するというのがエコツーリズムの考え方なのですが、これはまさしく歩く滞在交流型観光の目指すところと同じです。

それでは誰がこのような旅育の目的を達成するエコツーリズムを実現できるような地域作りをするのかというときに、5つの関連主体というのが一般的に言われています。地域住民が5つの主体の中でも中央に位置し、それをサポートする研究者、行政、観光客、観光業者がそれぞれ情報提供、開発ガイドラインの作成、人材育成などを行うことにより、地域づくりに関わる5つの主体がそれぞれの立場から、観光地域づくりを目指すという考え方が基本にあると思います。

エコツーリズムの進め方として地域づくりのプロセスがあります。一番目は宝探し。地域の自然・文化・産業・歴史・名人などの資源の発掘、そういうものを地図化した宝マップや

フェノロジーカレンダーのような生活季節暦を作って地域住民参加型の情報収集と整理をします。二つ目の段階はエコツアーのガイドの養成です。地域のさまざまな宝の価値を伝える人が必要になるので、プロのガイドであったり地域住民の方が、酪農であれば酪農のことを一番良く知っている酪農家の方に説明していただき、それぞれ得意分野を持った方々、名人、達人、一般の方々がガイドの人材として関わっていただくというのが第二段階です。3 つ目はエコツアーの具体的なプログラムを開発していくという地域の宝の魅力をツアーを通して、来場者と共有できるような具体的なツアープログラムを開発する段階です。4 つ目は体制づくり。地域住民が主体となって NPO であったり、観光事業者、行政、研究者、最近注目されている DMO などの観光地域づくりの組織、さまざまな利害関係者が 1 つの地域の空間において生活をしており、地域の自然や歴史文化の地域性があるので、それらをいかにマーケティングして、人を呼ぶための運営組織づくりです。最後は、観光資源として利用するだけではなく、保全するということを前提に、地域資源の価値を壊さないためのルール作りが必要です。地域資源保護の協定、実施ルールをきっちりと地域で作った上で観光客の誘致を行っていくことが重要です。こういった 5 つのプロセスがエコツーリズムの一般的なプロセスですが、歩く観光を考える上でも非常に重要です。

改めて歩く滞在交流型観光と旅育を考えると、なぜ我々は歩くのか。直立二足歩行、当たり前のことですが、動物の中で人間だけが可能な行為です。ゴリラとかチンパンジーとかペンギンとかも直立二足歩行しているように見えますが、実際には直立していない。骨格的に人間しか直立して歩けない。歩くということは一番人間的な行為であるということが出来ます。歩くことによって手が自由に使える物を運ぶことができ、重たい脳を直立歩行で支えることによって頭脳が発達したのではないかとはいわれています。それによって人類が進化してきた。そう考えると直立二足歩行という歩く行為は非常に重要であると改めて思います。「歩く旅育」という言葉には、「歩く」と「学ぶ」という 2 つの内容が含まれています。歩くというのはある道があつてそこを自分の身体を使って二足歩行するということです。その周りには物質的な環境が存在しています。一方、学ぶということは精神的な側面で、歩く中で体験したり人と話して交流したり美しい景観に感動したり、地震とか津波とか地域の危険な場所を体感したりし、いろいろな情報を得ることです。歩くという物質的な環境の中での行動において、精神的にさまざまな学ぶ行為をしている。旅育というのは物質的な歩く行為と、精神的な学ぶという行為とを同時に経験しているということがいえます。ただ考えるだけではダメ、ただ体を動かすだけでなく両方ですね。身体と精神と同時に活性化するというのが歩くという旅育の重要な視点ではないかと思えます。

3 月の研究会の議論の中では、歩く滞在型観光に関する様々な課題が取り上げられました。例えば、担い手の問題。実際に地域において、住民と行政と民間とボランティアとがどのように利害対立を乗り越えて 1 つの方向性を見いだしていくのかという課題が出ました。また、歩き手のほうも最近、若い人は歩いていないのではないのか。どうしたら若い人にも歩いてもらえるのか、そういうことも考えないといけないのではないのかということも課題と

して上がりました。さらに、ゲストとホストの関係や間に立つインタープリターとかガイドの役割について、必ずしも歩く観光というのはゲスト・ホストという関係ではなく、何か新しいコミュニティが生まれているのではないかといった指摘がありました。場合によってはゲストとホストが逆転するような関係性もできたり、対等な関係でいろいろと交流して楽しむ現象が起こっている。このように、歩く滞在交流型観光を支える担い手や利害関係者の問題があります。

観光の内容として、ウォーキングだけではなく、自転車やカメラを使ったり、環境に負荷を与えない行為が中心になります。そこでいかに魅力的なツアーのプログラムやコンテンツを作っていくのが問題になる。ただ歩くだけではなく、時間を使って滞在・交流するとそこでお腹が空けば食べる必要も出てきます。また単に食べるだけではなく「旅育」という言葉は、食育からヒントを得ているわけですが、食べる文化、自然の恵み、その地域で取れる食材を使って地域住民の工夫によって作られたおいしい旬の物を食べるという食育、そういうものを歩く観光の中で楽しみながら学ぶことができます。泊まるということも、どういう泊まり方をするのか、どのような泊まるサービスを提供するのか、ということも考えてる必要があります。

3つ目の課題としては、継続性とか持続性の問題が挙げられます。自律的地域社会の意味は、観光だけで自律するのではなく、その地域に固有の産業や歴史文化に基づく暮らしがあって、そういう地域社会が自律しているところに、さらに新しい観光の視点を取り入れて地域を活性化していくという考えが基本にないと、短期的に多くの観光客に来てもらうことだけを考えていても持続しません。逆に地域住民の暮らしに悪影響が及びます。ビジネスモデルをきっちりと考えていかなければいけない。土産物の開発、特産品の開発、要するにリピーターや場合によっては移住したいと思えるような地域の魅力を発信できるような観光が歩く滞在交流型観光では重要となります。このように、長期的に持続、継続することが大きな課題であると前回の研究会で出ておりました。

本日の論点としましては、歩く楽しさとは何なのかということの一つは考えたい。二つ目は歩くことと旅育との関係はどこにあるのか。三つ目は歩くことでどのような交流が生まれるのか。四つ目は歩くことで地域がいかに元気になるのか。これらを考えることが今日、皆さまに集まっていただいて多少なりとも議論できれば今後の地域作りに有効な情報が得られるのではないかと考えております。

これから事例報告、発表等、みなさま方も交えて議論を活発にしていきたいと考えております。本日この後、ご登壇していただく佐伯様の「北根室ランチウエイ」の取り組み、次に小林様の「境界をたどる旅」、3番目の発表としては博士課程の樋口さんによる「台湾桃米村、南三陸における歩く観光」、そして、最後に山村先生による「北大キャンパスと南砺市におけるヘリテージ・トレイル」といった4名の方に非常に興味深いお話をいただけたと思いますのでよろしく願いいたします。

また、明日の午前中はエクスカージョンがあり、①コースは境界を実際に探索し、②コー

スは北根室ランチウェイを歩かせていただく予定です。非常に盛りだくさんの予定ですが、
よろしくお願ひしたいと申います。以上で趣旨説明を終わります。

引用文献

エコツーリズム推進協議会

1999 『エコツーリズムの世紀へ』 東京：エコツーリズム推進協議会。

森下昌美

2013 「“旅育”の現状と定義を考える」『日本国際観光学会論文集』 20: 49-54。

佐々木土師二

2000 『旅行者行動の心理学』 吹田：関西大学出版部。

第26回 CATS コロキアム
「歩く滞在交流型観光と“旅育”に関する研究」

趣旨説明

北海道大学観光学高等研究センター
下休場 千秋

○「歩く滞在交流型観光の新展開」をテーマとして、2018年3月に北大で開催した「第6回 CATS 観光創造研究会」での議論をもとにして、歩く滞在交流型観光が地域活性化と“旅育”に果たす役割を明らかにすることを目的とする。

○歩く滞在交流型観光の事例

- ロングトレイル（信越トレイル、潮風トレイル、九州自然歩道）
- フットパス（イギリス、日本各地）
- オルレ（済州島、九州、宮城）
- 聖地巡礼（サンティアゴ巡礼、四国遍路、熊野古道）
- まち歩き（佐世保時旅、水郷柳川ゆるり旅）

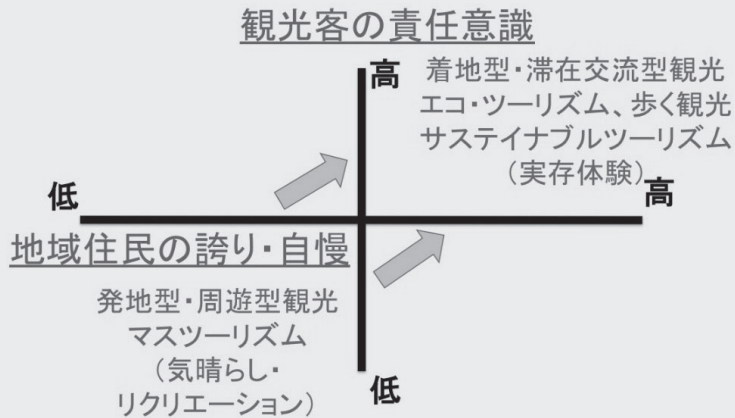
○人は観光に何を求めるのか

（観光行動の5つの発動要因）

- ① 緊張を解消したい（緊張解消）
- ② 楽しいことをしたい（娯楽追求）
- ③ 人間関係を深めたい（関係強化）
- ④ 知識を豊かにしたい（知識増進）
- ⑤ 自分自身を成長させたい（自己拡大）

出典：佐々木土師二『旅行者行動の心理学』 2000年

自律的地域社会と“旅育”



5

“旅育”とは、「旅する人と地域の人
が共に多様な学びの機会を得ることにより、
旅を通して人間として成長すること」を
意味する。

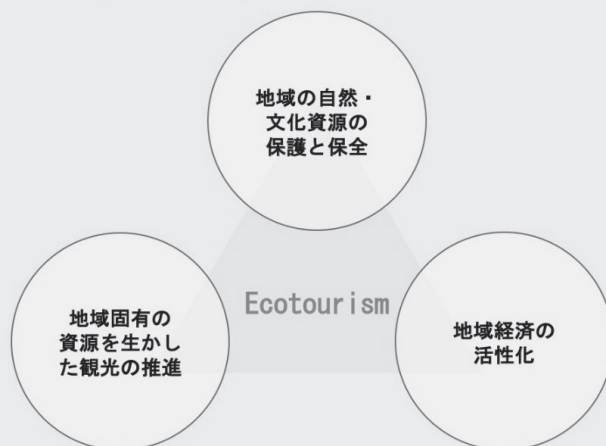
“歩く旅育”：「歩くことを通して、
人は何を学ぶことができ、どのように、
成長することができるのか。」

○旅育の3つの要素

- ① 旅の体験（異文化・非日常体験、旅先での交流など）
- ② 人との時間共有（家族・友人・未知の人との共通体験、思い出づくり、日常と比較した共有時間の長さなど）
- ③ 旅を素材とした教育（職業教育、郷土教育、地理・歴史教育、国際化教育、防災教育など）

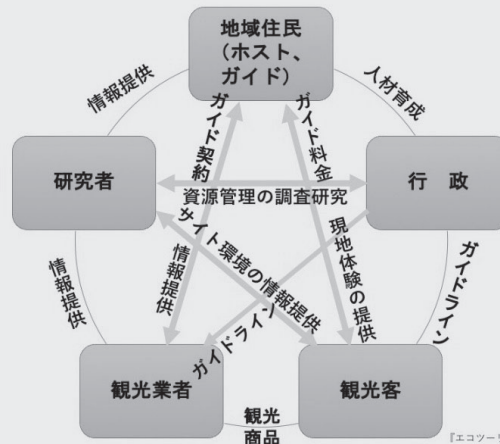
出典：森下晶美「“旅育”の現状と定義を考える」日本国際観光学会論文集（第20号）2013年

○ エコツーリズムの三つの目的



『エコツーリズムの世紀へ』p24, エコツーリズム推進協議会, 1999.

○ エコツーリズムの関連主体



○ エコツーリズムの進め方

1、宝探し

自然、文化、産業、歴史、名人などの資源の発掘、宝マップ、フェノロジーカレンダー（生活季節暦）

2、エコツアーガイド人材の養成

プロ、名人、達人、一般住民

3、エコツアープログラムの開発

地域の宝の魅力をツアーを通して来訪者と共有

4、運営体制づくり

地域住民、NPO、観光事業者、行政、研究者、DMO等のステークホルダー（利害関係者）によるマーケティング、保全活動

5、ルールづくり

地域資源保護の協定、自主ルール

『季刊 ECOツーリズム 67号』p8, NPO法人日本エコツーリズム協会, 2005。

歩く滞在交流型観光と“旅育”

- 直立二足歩行（動物の中で人間だけが可能な行為）

手の使用、頭脳の発達

- 「歩く旅育」の内容：

歩く・物質的側面（道、身体、環境）

学ぶ・精神的側面（体験、交流、景観、防災、情報）